

大江戸線のむっちりナマ脚

三 春

秋も深まり一気に冷え込んだ十一月半ば、大江戸線車中でのことだ。青山や六本木など華やかな地域にも停車するせいか車内にはお洒落な女性や外国人もチラホラ。隅に立っているのは上品なマダム。シルクのコートにお揃いのバッグ、深めに被った帽子の下で瞋目中だ。かと思えばその隣では制服姿の男子中学生たちが、ニキビ面をにやつかせながら噂話で盛り上がっている。

吊革にぶら下がった私は、目の前の席をなにげなく見下ろしてドッキリした。

むっちりと肉付きのよいナマ脚の太ももがショートパンツから伸びている。そこで初めて顔を見ると日本人ではない。金髪に白い肌、三十歳代に差し掛かったばかりか。美人とは言えないが、つつすらと桜色に染まった豊満な素足はいかにも柔らかそうで、つきたての餅を連想させる。突つつけば指がめり込むだろう。男ならずとも刺激的かつ魅力的で見とれてしまった。本人もそれが狙いに違いなく、今から六本木でボーイハントじゃなかるうか。

地下鉄は景色が見えなくて退屈だから様々な考えや思い出が行き交う。

そういえば子供の頃、痩せっぽちの従妹は脚の間から向こうの景色が見えるとからかわれていたのに、おデブの従妹は陽気で活発で人気者。ガキ大将の一の子分だった。

そういえば学生時代、細目と太目どちらの女の子を好むかと十人ほどの男性に尋ねたら、殆どが細目と答えたのに対して、ぽっちゃんりふわふわが断然イイと言ったのが一人だけいたっけ。今にして納得。

そういえば社会人一年生の時、用もないのに青山辺りでクーペを乗り回していた。赤信号で止まると隣車線のオープンカーに人気女優の姿。まるでスポットライトを浴びたかのようにそこだけ光り輝いていて目を奪われた。あれがオーラというものか。

こんな風にポーツとしているとまた乗り越してしまいそうだ。私にとって一駅や二駅の乗り越しは日常茶飯事なのだが、四駅オーバーのときは我ながら呆れかえった。

あつ、次は大門だ、降りなきや！